

入退院を繰り返す子供を支える病弱教育  
～病弱・身体虚弱特別支援学校と居住地校との連携を通して～

愛知県教育委員会特別支援教育課

## 1 はじめに

病気で入院する子供たちの中には、自分の体調や病気、治療についての不安から心理的に不安定になる子もいる。入院し、学校を離れてしまうことによる学習の空白、友人関係が切れてしまわないか、居住地校への復学時にクラスに再びなじめるか不安を抱える場合もある。

近年、病気で入院する子供の入院期間は短期化する傾向にある。病気の種類によっては、短期間の入退院を繰り返しながら治療を行うケースがあったり、入院中でも一時的に自宅に帰ることができるケースや在宅で療養するケースも見られたりする。

このような入院、退院形態の多様化に伴って、入院中や一時退院中の学習保障の在り方や居住地校や仲間とのつながりの在り方について、多様な対応が求められている。

そこで、入退院を繰り返しながら治療を受ける子供が、居住地校とのつながりを切らすことなく、学習を継続していくことを目指し、県内の病院に入退院を繰り返している子供をモデルとして、病弱教育の仕組みや在り方に関する研究を行った。令和6年度、7年度の2年間、県立大府特別支援学校と関係教育委員会、居住地校が連携して取り組んだ実践について報告する。

## 2 研究のねらい

- 入退院を繰り返す子供の学習する機会を保障するために、条件整備を図り、その仕組みを検証する。
- 入院時も居住地校とのつながりを切らさないために、関わりを継続、育む取組の推進を図る。

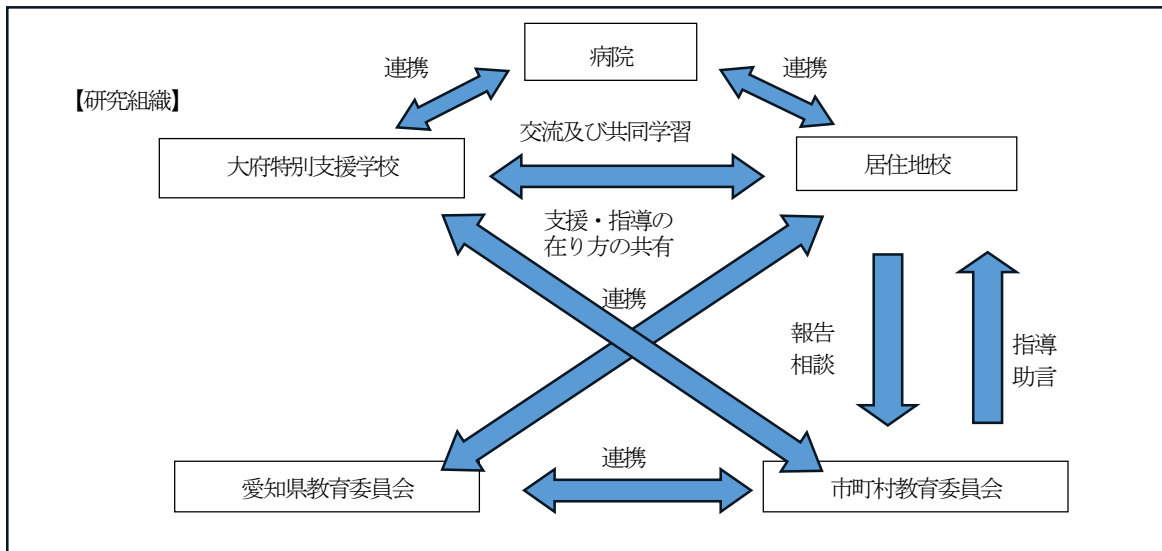
## 3 研究の方法

### (1) ともに籍をもち、切れ目のない学習を保障する取組

居住地校に主たる籍（以下、主籍）、大府特別支援学校に副次的な学籍（以下、副籍）を指定し、入退院を繰り返す子供の籍を居住地校と大府特別支援学校がともにもつようにした。その上で、学習の様子や評価、学習進捗の確認、支援・指導の共有など、入退院を繰り返す子供の学習保障を進めるにあたっての連携方法や進め方について検証した。

### (2) 地域（居住地校）との関わりやつながりを継続、育む交流及び共同学習の取組

ともに籍をもつことによって、入院に伴い大府特別支援学校に在学していても居住地校との関わりを切らすことなく継続していく取組の在り方や、一時的に退院し、居住地校に在学中でも、大府特別支援学校との関わりを切らさない取組の在り方を検証した。



## 4 研究の実際

### (1) ともに籍をもち、切れ目のない学習を保障する取組

#### ア 教材や学習プリントの共有

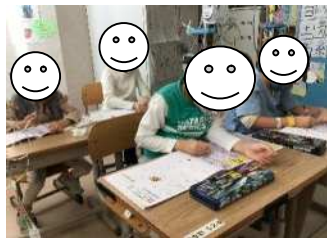
居住地校に主籍を置きつつ、入院時には副籍のある大府特別支援学校で交流及び共同学習の一環で学習を行った。入院中でも居住地校に籍があるため、学級内には机、いすなどがあり、いつでも登校して学習できる環境が整えられており、一時退院のときなども、登校しやすく、学習にもスムーズに入ることができた。入退院を繰り返す子供が、次の入院までの退院期間中や入院中の一時帰宅や自宅療養中などの際には、体調に応じて居住地校の授業に参加した。保護者が、事前に居住地校に登校できそうな日を伝え、主治医の許可のもと授業に参加した。

入退院を繰り返すことで生まれがちな学習の空白をなくすために、互いの学校が密に連絡を取り合った。学習進度を確認したり、学習の様子を伝え合ったりするなどして、子供が切れ目なく学習を進めていけるように配慮した。

事例1のように、両校で相談の上、居住地校で使用している漢字ドリルなどの副教材を使用することを決め、共同で学習を進めた。教材を共有することで、互いの学校で学習ができていなかった部分を把握しながら学習の空白を作らずに進めることができた。

#### 事例1

居住地校の学習で使用している漢字ドリルを持参してもらうことで、途切れることなく学習に取り組むことができました。



【居住地校と同じ漢字ドリルで学ぶ児童】

#### 担任の声 (大府特別支援学校)

大府特別支援学校と居住地校で使用している教科書が異なり、どのように進めていくか迷いましたが、友達と一緒に漢字ドリルの学習に取り組むことができ、うれしそうでした。居住地校でできていなかった漢字を練習できるときもあり、未学習の部分をなくすことができました。

## イ 学習進捗を知らせる連携

時間帯によっては電話連絡で担当者同士が連絡が取りづらい場合もあったため、事例2のように、互いに教科書に付箋をつけ、どこまで学習したかが分かるように伝達の仕方を工夫することもあった。居住地校からも学習の進み具合や様子、評価を大府特別支援学校に伝えることで、居住地校で不十分になっていた学習内容を大府特別支援学校で復習できるなど、連携を密にし、情報を共有することで学習の定着につながった例もあった。

事例3では、大府特別支援学校で使用した学習プリントをファイルにまとめ、教材や学習の結果を共有したり、電話で適宜情報交換をしたりして、互いに学習内容や学習の様子を共有するよう取り組んだ。保護者も教材を学校間でやり取りしたり、連絡を密に取り合ったりしていることを知って安心する様子が伺えた。

事例4の【図1】のように、大府特別支援学校の学習時の記録を作成し、居住地校に送ることで、大府特別支援学校での学習の進捗が分かるようにする取り組みも見られた。

事例5のように居住地校の採択教科書と大府特別支援学校の教科書が異なるケースがあったため、学習の進み具合や学習内容を両校が確認しながら学習を進め、学習の漏れが出ないように努めた。子供の漢字ドリルを大府特別支援学校の教師が見て、居住地校で学習できていなかったところを指導するなどして、居住地校からの学習をできるだけ継続できるようにした。

事例6では、大府特別支援学校で登場人物の気持ちを考えた音読ができるようになった後、居住地校の授業でも学んだことを生かして感情を込めて教科書を読むことができた。頑張ったことが認められる機会をもつことができた。できることが増え、学習意欲が高まっていることを保護者も喜んでいる様子が伺えた。

事例7では、大府特別支援学校で取り組んだ「ボッチャ」を居住地校でも取り組み、クラスメイトと一緒に活動した。大府特別支援学校で経験したことを居住地校のクラスメイトに説明する姿が見られるなど、友達との関わりを深めることができた。ボッチャを交流学級の子供たち、他学年の子供たちと行うこともあり、居住地校において友達との関わりを広げることができた。

このように、学校同士で連絡を密にとり、それぞれの学校で行った学習の進捗を入退院の際に伝え合うことで、学習の空白や漏れがないように配慮することができた。学校間で学習の進捗や様子を確認し合うことで、子供のペースに合わせて学習ができることに保護者も安心している様子が伺えた。

### 事例2

入院前と退院後に、大府特別支援学校の担当者と連絡を取り、学習の進捗についての情報交換をしました。電話で互いの学校での様子を話したり、教科書に付箋を貼ったりしたことで、本人が切れ目なく継続して学習に取り組むことができました。

大府特別支援学校から学習の取り組みについての報告があり、本人の興味関心や努力を知ることができました。

#### 担任の声 (居住地校)

本校で不十分になっていた学習内容を大府特別支援学校で復習していただいたことで、定着につながりました。改めて本校でその内容に取り組むと、自信をもって答える本人の姿が見られ、互いに進捗の確認しながら学習を進めた成果を感じました。

#### 保護者の声

学校間で連絡を取りながら同じ教科書で進めてくれることがありがたいです。また、本人のペースに合わせて無理なく進めてくれるので、少しずつ学力が高まっている気がします。

### 事例3

居住地校の担任と電話連絡をし、本児の様子や習熟度、学習進度、内容について、適宜情報交換をしました。その情報を基に、居住地校が図工の教材やドリル等を注文し、保護者を通じて受け取ることができました。本児も居住地校と同じ教材を使って学習していることを知るとうれしそうでした。ともに籍をもつことで、互いに気兼ねなくやり取りをすることができました。

学習したプリントは全てファイルにまとめ、居住地校に戻った際に、ファイルを見れば本児の習熟度や学習内容が把握できるようにしました。また、本児が登校した際の様子をまとめたプリントも渡しました。

評価は、本児の学習内容や頑張りを文章で表記し、居住地校から渡しました。

#### 担任の声 (大府特別支援学校)

教科書を使って学習することが難しい児童のため、児童の実態に合った学習プリントを渡せたことで、居住地校の担任も本人も困らずに授業が始められると思います。

居住地校の担任からも、いつ戻って来ても本児や学習の様子が分かり、安心ですと言われていました。

#### 保護者の声

先生同士が密に連絡、情報交換をしてくださっているので安心しました。

#### 病棟看護師の声

居住地校との関わりを減らさないよい取組だと思います。

### 事例4

#### 担任の声 (居住地校)

学校間で連絡をとり、学習の進度について情報交換をしました。また、対象児童の得意なこと好きなことなども伝え、少しでも信頼関係がつけられるようにしたことがよかったです。

大府特別支援学校の担当者と電話で密に情報交換をしました。

居住地校と大府特別支援学校では、採択教科書が違っていました。大府特別支援学校では、在籍する期間に対象者1名であったため、居住地校の教科書に合わせて学習を進めることができました。

交流後には、大府特別支援学校から記録が届けられ、学習の進度や出欠席状況を確認することができました。(図1参照)

#### 保護者の声

居住地校との環境の違いにより、学習の進度が気になっていました。しかし、担任の先生が、大府特別支援学校と密に情報交換をしてくださったと聞いて、とても安心しました。

実際の授業では、教科書に沿って分かりやすく説明していただきました。質問しやすい雰囲気もつくっていただき、我が子は、安心して取り組むことができました。

【図1】 令和6年度 小学部 交流の記録

愛知県立大府特別支援学校

		名前	
学習期間	令和6年9月3日～令和6年9月13日		
出欠席の記録	出席	9日	
	欠席	0日	
	遅刻	4日 (9月3日、6日、10日、13日)	
	早退	0日	
教科	学習内容(単元名等)	授業時数	備考
国語	風切るつばさ、つなぐ言葉の使い分け	7	P89まで学習
社会	天皇中心の国づくり、貴族の暮らし	6	聖武天皇の政治、国風文化
算数	円の面積、角柱の体積	8	P104まで学習
理科	大地のつくり	3	P39まで学習
音楽	荒城の月 花 嵐の世界	3	
図画工作	わたしの感じる秋	3	
保健体育	喉痛の書と健康、秋酒の書と健康 アロマソング	4	
家庭	楽しく快適に通ぐ住まい方	3	
外国語	Unit3	2	P32までを学習
書写	中秋の名月	1	
その他			
作成者		保護者の確認	作成時 <input type="radio"/> 送付時 <input type="radio"/>

### 事例5

大府特別支援学校と居住地校で採択教科書が異なったため、国語は新出漢字の学習にもれないように注意したり、社会では居住地校の学習内容を取り扱ったりしました。また、本児の病状や気持ちに合わせ、寄り添った支援が行えるよう両校での本児の様子を情報共有するよう心がけました。退院の際には、本児の実態に合わせて学習を進めたことも伝えました。

#### 保護者の声

前年度から引き続き、断続的に入院したので、そのつど、転校の手続きをせず、大府特別支援学校での学習を始められることが大変よかったです。本人も両方の学校を自分の学校だと思っています。

#### 担任の声 (大府特別支援学校)

体調や受診の関係で、居住地校でも遅刻や早退をしたり、体育に参加できることが少なかったりしたので、限られた学習時間で、両校で確実に学習を積み重ねることができてよかったです。

### 事例6

大府特別支援学校で「スイミー」の音読に取り組みました。退院後に本校で音読をした際、せりふに登場人物の感情を込めて音読することができました。本校でも本人の頑張りを認められる場となりました。

#### 担任の声 (居住地校)

治療や自宅療養期間によって、学習の遅れが生じますが、大府特別支援学校で学習を進めていただくことで、遅れを最小限に抑えることができました。

#### 保護者の声

最近は家でも少しずつ勉強をするようになりました。できることが増えた喜びを感じ、「もっとやりたい」という本人の学習意欲の高まりを感じています。

### 事例7

大府特別支援学校で「ボッチャ」をやったことを知り、本校でも特別支援学級や協力学級の児童、教員と取り組みました。経験した種目だったこともあり、友達にルールを説明したり、楽しく活動したりすることができました。投げる運動や調整力を身に付けるとともに、友達との関わりが増えるきっかけにもなりました。



【ボッチャに取り組む児童】

#### 担任の声 (居住地校)

体の麻痺により運動が制限され、どのような運動が適しているのか模索している中、体の機能を高めたり、思考を深めたりすることができる教材「ボッチャ」を教えていただきました。

すべての児童が楽しみながら意欲的に取り組むことができるため、交流学級や他学年の児童などと多くの関わりが生まれ、社会性を伸ばすことにもつながりました。

## ウ 配慮事項の伝達

学習面の連携だけでなく、病院関係者とのつながりがある大府特別支援学校から、居住地校で

の過ごし方で気を付けることや配慮するとよいことなども情報交換することができた。(事例8)

また、大府特別支援学校での学校行事に参加しやすくするために、家庭や居住地校と連携をして、自宅療養中でもできる課題を共有することもあった。(事例9)

### 事例8

居住地校に通う際に、外泊中の注意事項や今後の入院・治療スケジュールなどを、病棟や保護者から確認し、保護者の許可を得た上で、居住地校の担任に伝えました。少しでも学習意欲が高まるよう学校に通う日や授業時間(本人が希望する教科)や時間数などを事前に伝えました。

また、感染症が流行しやすい時期の居住地校への登校だったため、座席の位置や保健室利用、保護者の待機場所の確保などをお願いし、初回の授業参加時に担任と学年主任から保護者に伝えてもらえるように依頼するなど、体調面での情報共有、連携を行いました。

### 事例9

大府特別支援学校の行事「わくわくまつり」に参加できるようにするために、退院時に次回までにイラストを描いてくる宿題を出したり、一時退院中に自宅でも練習できるようにダンス動画を渡したりしました。限られた登校日数でしたが、みんなと同じように参加することができました。



【わくわくまつりに向けて練習する児童】

#### 保護者の声

あまり練習に参加できていないうちの子でも、みんなと同じように参加できるように工夫してくださってありがたいです。よい思い出ができました。

#### 担任の声(大府特別支援学校)

みんなと一緒に活動することが好きなお子さんなので、行事に参加することができてよかったです。

## (2) 地域(居住地校)との関わりやつながりを継続、育む交流及び共同学習の取組

### ア 居住地校の行事への参加

病気で入院する子供たちは、入院し、在籍した学校を離れてしまうことによって、今までの友人関係が切れてしまわないか、居住地校への復学時に学校生活に再びなじめるだろうか不安を抱える子もいる。

これまでの例として、入院中に居住地校の行事に参加するために一時的に籍を戻して参加することが多かったが、ともに籍をもっていることで、事例10や事例11のように、一時退院中や自宅療養期間中に、主治医の許可を得たうえで、居住地校で行われる学校行事に参加することができた。病状の関係ですべての日程や、競技に参加することはできなかったが、運動会ではクラスメイトを応援したり、居住地校の教員に声をかけられたりする姿が見られた。

病院関係者の声にあるように、行事を通じた居住地校とのつながりが、子供にとっては復学への希望となったり、退院後の登校を後押ししたりしていることが分かった。

## 事例10

保護者と相談をして、体育大会に参加しました。競技に参加することはできませんでしたが、別室登校の席から保護者と午前の部を参観することができました。体育大会後は、参観したことをもとにクラスの生徒と同じように振り返りを記入し、教室に掲示をしました。

合唱コンクールに際しても、疲れた時には相談室を使用できることを伝え、参加しやすくなるようにしました。

### 保護者の声

行事に参加することは不安が多かったですが、親子で参観することができてとても安心しました。クラスの競技を応援し、通りがかった友達にも手を振る姿も見られました。

### 担任の声 (居住地校)

行事への参加意欲はとても高く、クラスの生徒もすごく歓迎し、クラスで良い雰囲気の行事にすることができました。

### 病院関係者の声

地元の学校とのつながりが切れてしまうと、退院後に居住地校に戻るのが難しくなっていたと思います。つながりを続けてきたからこそ、現在登校できていると思います。

## 事例11

運動会でかけっこに参加する予定でした。可能な限り治療のスケジュールを調整しました。運動会に参加することを楽しみにしていました。体調が優れず、当日は参加することができなかつたのですが、運動会を見に行くことができました。

### 保護者の声

兄と同じ行事に参加できてうれしいです。参加は難しかったけれど、雰囲気だけでも味わうことができてよかったです。

### 病院関係者の声

地元の学校に顔を出すと、多くの先生方に声をかけてもらえたようで、これから退院していく子にとって、地元の学校というのは希望になるんだと感じました。

## イ クラスメイトとの交流や居住地校とのつながりを保つ取組

治療が終了すれば、地元の居住地校へ戻るが、学校を離れることで地元との関係が希薄になりがちであることから、自宅療養中に居住地校に顔を出せるようになった際には、クラスメイトとの交流活動を行った。

事例12では、久々の登校となった際は、学級が新しくなった年度初めということもあり、新しいクラスメイトとの交流活動を行った。入退院を繰り返す生徒ではあるが、この活動を通じて、次の登校への意欲が高まった。治療中ではあるが、交流活動を通じて、居住地校で新しい友達もできた(事例13)。

事例14では、入院中、大府特別支援学校の院内学級にいても、タブレット端末を使用して、居住地校の出来事や様子を伝えたり、子供が関心をもっている居住地校の給食メニューを知らせたりした。居住地校からの給食の連絡を楽しみにするなど、入院中でも、居住地校のことを意識することができた。

入院が年度をまたいで長引き、居住地校の新しい担任の先生や新しいクラスメイトとなかなか会

えない日々が続いた事例15のケースでは、居住地校の担任が、大府特別支援学校を訪れる機会をもち、子供との関係を少しずつ作っていった。入院中でも居住地校のタブレット端末が利用できたため、新しいクラスメイトから送られたメッセージ動画を見て、「9月は〇〇小に通うから」と話すなど、退院後の居住地校への思いを膨らませる様子が伺えた。

居住地校への復学に向けて、登校練習を計画したり、クラスメイトからのメッセージや給食や学習の様子を動画で事前に視聴できるようにしたりするなど、居住地校とのつながりを保つことができた（事例16）。

小学校の校長先生が病室を訪れ、2学期の通知表とクラスの友達からのメッセージを直接渡すことがあり、本人が喜ぶこともあった。



【居住地校の校長先生から通知表をもらう児童】

主籍のある居住地校、副籍のある大府特別支援学校のどちらにも籍があることで、病状や入院スケジュールによってどちらでも学ぶことができ、治療を進めながらも、居住地校の担任やクラスメイトとのつながりを保つことができた。

### 事例12

5月に部分的に登校できるということで、学級の時間を利用してレクリエーションを行いました。新しいクラスに変わったばかりで、はじめは緊張していましたが、だんだんと仲間も打ち解けていき、交流の時間を過ごすことができました。



【交流学級でレクリエーションに参加する生徒】

#### 保護者の声

徐々に学校に通うことができ嬉しかったと教えてくれました。可能な限り学校へ通わせて、みんなと同じ活動ができればいいです。

#### 担任の声（居住地校）

〇〇さんが教室に入ることをクラスの生徒も温かく迎えていて、より教室に入りたい気持ちが高まったようでした。

### 事例13

学校の委員会活動の一環で、学級でメッセージカードを交換しました。元々仲の良かった生徒と交流するだけでなく、今年から交流で知った生徒ともメッセージを通して交流することで、改めてクラスの友達との仲を深めることができました。

#### クラスの子からのメッセージ（居住地校）

Aさん「会った時に手を振ってくれてうれしかった。〇〇と話していると面白くてすごく楽しい。」  
 Bさん「絵しりとり楽しかったね。〇〇と話するのが楽しいからまたたくさん話したいな。昨年みたいに3人でおどろうね」  
 Cさん「小学校の時はあまり話せなかったけど、今年一緒のクラスでやっと話せてうれしいです。席がとなりだった時にいっぱい話せてうれしかったです。またいっぱいしゃべろうね」

#### 保護者の声

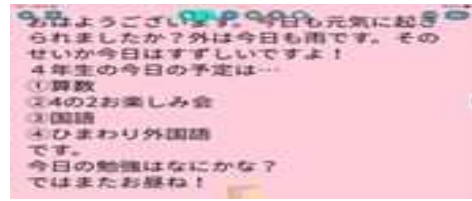
休薬期間中は自宅に帰ることができるため、居住地校の友達に会いたいという本人の願いを叶えたいと考えました。

最初は転出入を繰り返していましたが、今回のモデル事業で治療中でも自宅に帰れる期間は居住地の中学校に通えることになり、本人もうれしかったと思います。

### 事例14

入院しているときには、ロイロノートを利用した連絡を昨年度から続けており、4月には居住地校でのトピックスを見つけて様子を伝えていました。

大府特別支援学校の院内学級で話すうちに「給食が好きだ」という話題になったので、その日から居住地校の給食のメニューと写真を送り始めました。そのことを続けるうちに、朝に学校の様子等のメッセージ、昼に給食のメッセージを送ることが日常になりました。保護者からは本児が「給食の連絡を楽しみに見ている」と聞いています。



【ロイロノートで送ったトピックス】



【ロイロノートで行った給食についてののやりとり】

### 事例15

入院が長期化したため、2週間に1回程度、居住地校の担任が授業参観をしました。初めて関わる先生だったため緊張していましたが、回を重ねることに慣れ、本児から話しかけたり、一緒に遊んだりすることができました。

本児の様子や支援の方法、学習内容も直接伝えることができました。

#### 子供の様子

退院が近づいたときに、「夏休みは家に戻って、9月は〇〇小に通うから」と、自信に満ちた表情で発言していました。

#### 担任の声 (大府特別支援学校)

授業の様子を参観していただき、学習内容や支援の方法について引継ぎができたこと、本児と居住地校の担任との関係ができたことで、居住地校にスムーズに戻ることができると感じました。

### 事例16

夏休み初めに退院のめどが立ち、2学期は楽しみにしている給食の時間から登校を始めることにしました。昨年とは違う教室、違うメンバーとの生活が始まります。

教室の様子等を知らせるため、夏休み中に二度の登校を計画しました。そして、同じ教室の子供からのメッセージや給食・学習の様子の動画を視聴しました。本児の様子から、2学期からの生活への見通しがもてた安心感が伺えました。



【メッセージを動画で送る居住地校のクラスメイト】

## 5 成果と課題

### ○ 成果

#### (1) ともに籍をもち、切れ目のない学習を保障する取組

居住地校と大府特別支援学校とが、それぞれの学校での学習で使用している教材や学習の進度を知らせ合うことで、子供がスムーズに学習に入ることができ、学習を継続させることができた。また、学習を進める上での配慮事項を確かめ合うことで、安心して学習に取り組むことができる環境を整えることができた。

##### ア 教材や学習プリントの共有について

居住地校と大府特別支援学校で使用する学習を補助する教材やプリントは異なる。また、居住地校と大府特別支援学校で使用している教科書が違う場合も多くある。お互いの学校が連絡を取り合い、居住地校で使っている教材や学習プリントを大府特別支援学校での学習に取り入れることで、子供がスムーズに切れ目なく学習に取り組むことができた。同じ教材を使用することで、これまでの学習の積み重ねの過程を確認し、個に応じた学習を進める上でも有効であった。

##### イ 学習進度を知らせる連携

学習をどこまでどのように進めているか、学習の進捗に関する情報提供をこまめに行うことで、切れ目のない学習を保障することができた。また、学習の評価を伝えることで、その子に応じた学習をつないでいくことが可能となった。

また、退院時に大府特別支援学校で学習した内容を居住地校に伝え、その成果を退院後に居住地校で披露したり、生かしたりする場を設けることで、周りに認められる機会となった。学校間で学習内容や進捗を共有することで、子供たちが自信をもって学習に取り組むことにつながった。

##### ウ 配慮事項の伝達

入院、退院の際には、学習に関する引継ぎばかりではなく、大府特別支援学校でどのように過ごしていたかや子供の病状を考慮して、居住地校に登校する際に配慮するとよいことについても引継ぎを行った。その引継ぎをもとに、居住地校でも子供の体調に配慮しながら、学習への参加方法を考えることができ、安心して学校生活や学習を進める上で有効であった。

#### (2) 地域（居住地校）との関わりやつながりを継続、育む交流及び共同学習の取組

病気への不安に加え、友達と離れることや今までの居場所がなくなってしまうのではないかとという不安を軽減するため、行事の機会を活用したり、クラスメイト等との交流を意図的に設定したりすることで、つながりを保つことができた。

##### ア 居住地校の行事への参加

学校行事は、友達の存在を強く感じたり、所属感を高めたりする機会の一つであり、入院中でも居住地校の行事に参加したいと考える子供や保護者もいる。居住地校の行事への参加に照準を合わせ、そこに向けて居住地校と連携し、参加に向けた環境を整えることで、子供同士の温かなつながりの中で過ごすことができた。

##### イ クラスメイトとの交流や居住地校とのつながりを保つ取組

入院が長引いて、なかなか会えないとき、クラスメイトが動画やカードでメッセージを送ったり、居住地校の学校が大府特別支援学校を訪問し授業参観をしたり、つながりを保つ交流の機会をもつことで、子供は居住地校を意識することができ、地域とのつながりを保つことができた。「我が子は

どちらの学校も自分の学校だと思っている」という保護者の声もあった。居住地を離れても地域とのつながりをもつ上で、子供同士の関わりや居住地校との関わりを積極的に取り入れることは有効であった。

## ○ 課題

- ・子供の病状やそれに伴う必要な支援は、個別性が高い。それぞれの子供に合わせた環境整備を進めるには、居住地校と大府特別支援学校及び関係機関の間でより一層の連携が必要である。
- ・居住地校、大府特別支援学校、双方に籍をもつことは有効であったが、適切な籍の持ち方について今後検討していく必要がある。

## 6 おわりに

今回のモデル事業を通じて、居住地校、大府特別支援学校が入退院を繰り返す子供の籍をともにもつことによって、入院をしても居住地校とのつながりを保ち、学習保障を進めることができた。また、ともに籍をもつことによって、居住地校と大府特別支援学校とが互いに連携を深め、学習保障の在り方を検証することができた。

入退院を繰り返している子供たちは、治療が終了したら、いずれは再び地域に戻る子供たちである。居住地校とつながりを保ち、広げることは、学習の継続だけでなく、子供たちの安心感や治療へ向かうモチベーションとなりうるということからも欠かせない。今後、入退院を繰り返す子供の学習保障をより進め、地域とのつながりを維持し、育んでいきたい。